

## UDL 理論に基づくインクルーシブ授業の開発に関する事例研究：立命館アジア太平洋大学の1回生演習科目と必修言語科目を対象に

研究代表者：立命館アジア太平洋大学 准教授 鄭 鍾熙

### 研究内容の概要

近年、日本の大学における障害学生数と障害学生在籍率の推移は増加傾向にある。発達障害者支援法の成立(2005)、学校教育法の改正(2013)、さらには障害者差別解消法の施行(2016)により、教育の現場では障害を抱える学生を含めた多様な学習者が、より効率的に学べる環境の整備、授業改善が求められている。特に大学においては、LD、ADHD、高機能自閉症等の発達障害により学習面で困難を抱える学生(以下、発達障害学生)への支援が課題になってきた。国内の多くの大学では、そのような学生に対し、人権保障のためのいわゆる「合理的配慮」(困難を取り除くための個別対応)による学習支援を行っているものの、教育・指導上の工夫は教員間で効率的に共有されていない。今後は、物理的な授業環境の整備に加え、教員が学習者の持つ「特性」を理解し、全ての学習者が共に学び合える教授法とコンテンツを改善、もしくは開発する必要がある。このような教授法やコンテンツの開発を推進し、各担当教員が授業を運営することにより、大学においてもインクルーシブ教育の実践が可能であると考えられる。

本研究では、発達障害を抱える学習者を中心に、身体障害、精神障害、病弱・虚弱、その他の障害ではない「特性」を持つ学習者、さらには本学の多言語、多文化環境にあつての外国語話者、文化背景の違い、ジェンダー・マイノリティなど多様な特性を持つ学習者を意識しながら、大学におけるインクルーシブ教育システムのあり方について考察する。これは障害を持っている者と障害を持っていない者が共に学ぶ教育を目指してきたインクルーシブ教育研究の枠組みを拡大する試みとも言えるが、広く、教育のエクスクルーシブを減らすためのプロセスを考察する点においてインクルーシブ教育の精神に沿うものであると考えられる。

多様な学習者の学びを助ける手段として、米国のCAST(Center for Applied Special Technology)が提案している学びのユニバーサルデザイン(Universal Design for Learning、以下、UDL)のフレームワークを採用した授業改善、ケース・スタディを行う。UDLは、何を、どのように、なぜ学ぶのかを考えるために、学習に関する最新の神経科学と認知科学から導き出された理論で、異なる言語や文化、認知的な違いをもインクルーシブに指導できるデザインを可能にするフレームワークである(Tracey E. Hall, Anne Meyer, David H. Rose, 2018)。学習者それぞれの学びの特性(学習のスタイルや強み)を活用し、学習者の個性を尊重した授業を教師が構想できる可能性を広げられることから、排除される学習者がいないインクルーシブな教育の基盤を提供するものであると言える。また、UDLを基にした中核的な指導カリキュラムの中で柔軟な指導を行うために、テクノロジーの利用も重要な手段とされており、コロナ禍で一気に普及したオンライン授業においてもUDLの可能性が期待できる。UDLは、すでに国内外の小中学校で積極的に取り入れられているが、高等教育においても、障害を持つ、持たないに関わらず、全ての学生の学習効果を上げる教育方法として、欧米の大学が採用、実践し、効果を上げている(Burgstahler, 2013)。国内の大学でも、筑波大学をはじめUDLを取り入れる大学が出ており、さまざまな特性を持った学生への個別対応の必要のない授業のフレームワークとして、また、多様な学生の学びを保障する大学の使命として注目されている(バーンズ亀山, 2019)このような背景から、本研究でもUDLの考え方を基に本学での授業改善に取り組みたい。

手順としてまず、先行研究から国内外の高等教育の現場におけるインクルーシブ教育システム構築の動向と現状、課題、評価についての取り組みを概観し、本学における授業改善の手がかりを検討する。次に先行研究によって得られた知見をもとに、本学の1回生演習、言語科目の授業を中心に、UDLのフレームワークを援用した、授業改善のためのインクルーシブ教授法を提案し、ケーススタディとして、その教授法に沿った授業（対面もしくはオンライン）を実践する。その後、受講生を対象に量的、質的調査を行い、UDLの理論を検証し、授業モデルを提示する。APUの1回生演習科目、言語科目は入学後のグループ学習や大学生活を左右する重要な授業であると考えられる。個別指導に限界を抱えている教員の負担を軽くすると同時に、全ての学生の学びの保障を目指す。これらの研究と授業の実践が障害の有無、言語、文化、ジェンダーなどの側面で様々な多様性を包摂する本学においてインクルーシブ教育を実現する第一歩となることを期待する。

<本文中の引用文献>

Tracey E. Hall, Anne Meyer, David H. Rose編著、バーンズ亀山静子訳（2018）『UDL 学びのユニバーサルデザイン—クラス全員の学びを変える授業アプローチ—』

Burgstahler, S. (2013). Websites, Publications, and Videos. In S. Burgstahler (Ed.). Universal design in higher education: Promising practices. Seattle: DO-IT, University of Washington. Retrieved from [www.uw.edu/doit/UDHE-promising-practices/resources.html](http://www.uw.edu/doit/UDHE-promising-practices/resources.html)

バーンズ亀山静子（2019）「UDL:学びのユニバーサルデザイン—自分の学びを舵取りする—」, 日本学生支援機構.  
[https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/event/theme/r1/\\_icsFiles/afieldfile/2019/11/19/2019\\_01\\_4.pdf](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/event/theme/r1/_icsFiles/afieldfile/2019/11/19/2019_01_4.pdf)